

GROWING SPACE

CURATED AND PRODUCED BY SYNONYM

展覧会会期： 2022.7.30. (土) – 10.10. (月)

展示作家： 木村充伯、ルック・ショル、安宮理子

場所： バッティングららら緑店
〒458-0801 愛知県名古屋市緑区鳴海町杜若92

この度、展示空間「GROWING SPACE」のオープニング・エキシビションとして、バッティングららら緑店にて展示「GROWING SPACE」を開催いたします。本展は、国際芸術祭「あいち2022」とのパートナーシップを通じて開催されます。

2022年7月30日(土)から10月10日(月)にかけて行われる本展では、2021年3月にアーティストの安宮理子とのコラボレーションによって実現した、光が織りなすインタラクティブ・インスタレーション「神経一筋 機能」に加えて、SYNONYMがキュレーションを務める作品とインスタレーションをご紹介します。本展では、彫刻家の木村充伯による木彫の作品、ロンドンとオランダのロッテルダムを拠点とするビジュアルアーティスト、ルック・ショルの風景写真と映像作品、安宮理子のインタラクティブ・インスタレーションなど、多彩な作品が一堂に会します。

本展「GROWING SPACE」は、国際芸術祭「あいち2022」のテーマ「STILL ALIVE」に対するアーティストたちの反応を表現しています。「STILL ALIVE」というテーマは、ポストコロナ時代におけるグローバルな価値提案や美しさに焦点を当てたものです。本展は、共存とエスケープイズムというコンセプトを軸に、「自然/人間/動物」の関係性を提示します。それは、コロナ禍の収束が期待される今日において三者の共存関係について改めて考えると同時に、私たちを取り巻く環境に対する“気づき”と変化を促進するための提案でもあります。

エスケープイズムの真髄は、ユートピアの概念に由来します。はるか昔より、人類は不安や悲しみから逃れるため、架空の理想郷を思い描いてきました。コロナ禍というこの2年間、私たちはさまざまな忍耐や苦しみを強いられてきました。その結果、理性では抑えられない衝動が膨らみ、私たちを窒息させてしまうほど大きく膨れ上がったのです。その一方、ポジティブな変化もあります。世界の各都市でロックダウンが敷かれたことにより、人々は自然の大切さに気づきはじめました。人々は、開かれた自然に逃避することの素晴らしさについてふたたび話し合うようになったのです。私たちのねらいは、作品のキュレーションを通じてすべての人が逃避できるユートピアを創ることです。私たちが思い描くユートピアとは、謎めいたオーラに包まれた島々が存在するゲームのような世界です。謎めいたオーラは、メインとなる物語の語り手となって現実から空想の世界へとオーディエンスを誘うと同時に、隠れた世界を秘めたボーナスステージを創出します。そこでは、あらゆる作品との共存関係が構築される一

方、人間と動物、そして自然までもが「成長、発展、死」という存在の法則から免れられないことを教えてくれます。

本展は、オーディエンスを瞑想や交流へと誘うだけでなく、異なるスペクトルを通じて私たちを取り巻く環境を体験させてくれる作品との出会いの場でもあります。またヒノキの香り、木村の彫刻作品と場が醸し出す空気も感じていることでしょう。それと同時に、すべての人に人間の体や絶滅の危機に瀕している野生動物たち、自然への理解を深めていただくという教育的な願いも込められています。バッティングセンターは、大人と子どもが楽しみ、学ぶための場です。そして何よりも、本展はアートの可能性に関する人々の既成概念をより自由に開かれたものにしたいと願っています。アートにもう一度チャンスを与えてみませんか？ パンデミックや戦争という困難な状況下でも、人類は前進し、進歩しています。ハングリーさと好奇心を持ちつづけましょう。明るい未来はすぐそこまできている——私たちは、そう信じています。

会期中の8月24日(水)には、SYNONYMと名古屋市名東区を拠点に英語教育を展開する「サクラキッズインターナショナル」が共催する、小学生向けのアートワークショップが開催されます。彫刻家の木村充伯を講師に迎え、自分でアートを創る楽しさを子どもたちに体験していただきます。本イベントは、国際芸術祭「あいち2022」組織委員会とHémash株式会社の温かいご支援とご協力によって実現しました。

木村充伯

1983年静岡県生まれ。名古屋造形大学彫刻コース卒業。2007年に同大大学院環境造形研究修了。日本やアジアのみならず、2017年のリヨン・ビエンナーレをはじめ、ヨーロッパなどのグループ展に積極的に参加。近年は、日本と韓国で個展を開催している。

木村充伯は、木彫や油彩絵の具で塑像した作品を手がける彫刻家です。木村は、日常のひと時や予期せぬ親密さを感じるふとした瞬間から作品のモチーフを選びます。一目で好奇心を掻き立てる、純粹で遊び心にあふれた木村の作品には、どこかユーモラスで楽しげな側面があります。大好きな動物たち、舟越桂やゲオルグ・バゼリッツといった彫刻家の作品、5～6世紀の古墳時代の日本で普及したアニマリズムの思想をインスピレーション源とする木村は、木という素材だけを使って作品を創ります。作品の最終的な形は、木の特徴によって決まります。2015年、木村はチェーンソーを使って木の表面を彫るという独自の技法を模索しはじめました。木の表面を特殊加工してチェーンソーで毛羽立たせることで、動物の毛を再現することができます。こうした試みは、命の儚さを表現するのではなく、媒介物の曖昧さ、ひいては命と死の境界線を想起させます。

2020年9月、静岡県浜松市の鴨江アートセンターの常設アートプログラムに参加していた木村は、コロナをきっかけに「呼吸」(2020)という作品を制作しました。この作品は、多種多様な動物と“呼吸”の概念をテーマとした、進行中の彫刻プロジェクトです。「呼吸」は、人間と動物が肺を使って行う、シンプルでありながらも複雑な呼吸のプロセスをもとに、現在の社会状況下で動物との共存関係を掘り下げようとする木村の試みでもあります。

本展では、「呼吸」という作品シリーズのボキャブラリーをさらに広げるため、木村は私たちの意識を“サイガ”に向けます。サイガとは、中央アジアに生息する牛科の草食動物で、絶滅危惧種に指定されています。サイガの特徴は、何と言ってもその大きな鼻です。この鼻は、冬場は吸い込んだ空気を暖めて湿らせる一方、夏場は空気を冷やすという機能をもっています。サイガを表現する素材として、木村は日本に広く分布するヒノキを選びました。サイガに着目し、この神聖な動物と私たちとの距離感を縮めることで、木村は、人間も動物も呼吸という自然のサイクルに関わっていることを改めて教えてくれます。その一方、木村は人間として存在し、生きることの意味に思いを馳せながらも、人間主体の現代社会における「自然/人間/動物」の関係の基本的な共通点とは何か？ と問いかけます。

ルック・ショル

1991年オランダ生まれ。独自の空想世界を生み出すビジュアルアーティスト。2009年から2013年にかけてオランダのハーグ王立美術学院にて学ぶ。2015年にウィレム国王学院の写真科を卒業。2021年にロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートにて修士号を取得。毎年7月にオランダで開催される世界最大級のジャズフェスティバル「ノース・シー・ジャズ・フェスティバル」やアムステルダムゴッホ美術館、ロンドンのアートスペース「クロムウェル・プレイス」などで作品を展示。現在は、ロンドンとロッテルダムを拠点に活動している。

ルック・ショルは、作品を通じてフィジカルあるいはデジタルな逃避的世界を探求し、そこに疑問を投げかけるというアプローチで作品に取り組むアーティストです。ショルは、こうした世界をある時は自らの足で、またある時はマウスやゲーム機のコントローラを使って行き来し、カメラを駆使して瞑想的な体験をもたらす謎めいた巨大なイメージを創作します。人間の条件としてのエスケープイズムとは何か？ エスケープイズムという一見捉えどころのないものは、どうしてこうも重要なのか？ ショルは、こうした問いの答えを探ります。

本展は、ショルにとって初となる日本での展示です。本展のためにショルは、進行中のふたつのプロジェクトを組み合わせた作品を用意しました。そのふたつとは、謎めいた風景を主役に据えた巨大な作品、「The Contemplative Landscape」(2015～)と「Underneath the Giant」(2021～)です。自然のなかで撮影された風景と丁寧に作り込まれたシーンを織り交ぜることで、ショルはエスケープイズムと“崇高”の両方を感じさせる作品を創作しました。これらの作品は、私たちが経験したロックダウンとその後の自然への回帰における自然の風景のなかでの経験との交流の構築を目指しています。「写真は、現代の大きな画面や小さな画面と複雑に絡み合った媒体です」とショルは話します。「作品の印刷プロセスは、立体的に創られた風景にコンセプトチュアルなレイヤー感を添えてくれます。見事なプリントは、スクリーン画面から離れる機会を与えると同時に、イメージを完結させて命を吹き込みます」。展示されているすべての作品は、ドイツの高級インクジェット用紙「ハーネミュレ」にプリントされ、展示空間内のいたるところに吊るされます。ショルは、展示空間全体をゲームの世界として活用しています。さまざまなリージョンやチェックポイントをぜひご覧ください。

本展では、熾烈さを残しながらもゆっくりと消えてゆく炎の映像を含む「Inferno」(2017)の上映も行います。

安宮理子

1993年大阪生まれ。2015年に京都精華大学を卒業後、2019年にロンドンのセントラル・セント・マーチンズにてアート・サイエンスを専攻し、芸術学の修士号を取得。現在は、東京を拠点に活動している。

安宮理子は、人体解剖学に関連したビジュアルアート作品や工芸品を手がけるアーティストです。安宮は、ビジュアルアートを使って人間の体に関する知識を文字情報よりいかに魅力的に表現できるかを探求します。さらには、教育や展示の内容がより効果的に伝わるようにと、テキスタイルやミクストメディア、3Dコンストラクション、インスタレーションといった多種多様なメディアを駆使して、私たちが人体に関する気づきや理解度を深めることを奨励しています。人体解剖学の実践に深く根ざしながらも、ブリジット・ライリーやマン・レイ、池田亮司などのアーティストたちからインスピレーションを得たアプローチを通じて、安宮は人間の体の知覚の可能性をめぐる別の表現の世界を創作し、マルチメディア・アート作品を通じて、より多くの人々とコミュニケーションを図りたいと考えています。

本展では、2019年と2021年に安宮が手がけたふたつのインタラクティブ・インスタレーションを展示します。人間の心臓はふたつの心房とふたつの心室から構成され、自らの筋肉を縮小させることで全身に血液を循環させています。「Heartbeat」(2019)は、私たちの命を支えている心臓の仕組みと動きを表現したインスタレーションです。オーディエンスは、心拍センサーを通じて自らの心臓の循環サイクルを可視化し、学ぶことができます。

「神経－筋機能」(2021)は、バッティングらららとのコラボレーションを行うにあたり、SYNONYMが安宮にコミッションしたインスタレーションです。作品の外見は、人体骨格模型のシャンデリアを想起させます。この作品は、電気信号が神経から筋肉へと伝達される様子を光で再現し、まるで人間の体が動いている時に拡張したり縮小したりするように、観る人の場所に応じてさまざまな光の動きを魅せます。

About SYNONYM (シノニム)

SYNONYMは、コミュニティ(共同体)と、そこに根差す人々が紡ぎ出す物語に焦点を当てた、オンラインおよびオフラインのネットワーク・プロジェクト・スペースで、木村宗一郎とアクセル・ワンによって創設されました。アート及びデザインのプロジェクトや、展覧会のディレクター、キュレーター、プロデューサーとして、構想から実現までを担い、商業、潜在的価値、文化の各分野の架け橋となり、その領域の限界を超えることを目指しています。

名古屋(日本)とロンドン(英国)から始まった【SYNONYM】には、「個々人の違いを超えて、共有できる『何か』が私たちの中には在る」という意味が込められています。常に進化し続けるこの空間を介して皆さんを、この日本を起点として、様々なアイデアや「もの」が結びつくことで生まれる新たな価値と、それを共有してゆく旅にお連れしたいと思えます。

同時並行的に、SYNONYMは世界中の都市の美術館、アートスペース、イベントを記録するオンライン・ジャーナルでもあります。この空間を通して、アート、ファッション、クラフト、デザインなどの分野で活躍するクリエイター、アーティスト、ギャラリスト、デザイナーとの対話を進め、世界中の才気溢れるクリエイターを結びつけることを目指しています。

Contact お問い合わせ

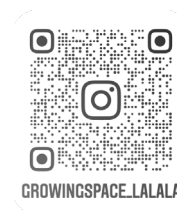
SYNONYM www.synonym.jp hello@synonym.jp

GROWING SPACE

バッティングらら緑店

〒458-0801 愛知県名古屋市緑区鳴海町杜若 9 2

電話:(052) 891 - 5151



Credit

展示作家: 木村充伯、ルック・ショル、安宮理子

キュレーター: アクセル・ワン/ SYNONYM

プロデュース & プロジェクトディレクション: SYNONYM

設営協力: 山信建設

グラフィックデザイン: トレイシー・チュオン

エキシビションパートナー: 国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局

GROWING SPACE 運営協力: Hémarsh co.,Ltd _ エマッシュ

ワークショップ協力: サクラキッズインターナショナル

Special Thanks: JILL D'ART GALLERY _ ジルダールギャラリー



SYNONYM